

大学生協京都事業連合 副理事長 **北野 和男 さん**

「仕事・労働組合・生協をふりかえる」

北野副理事長は、京大の事務畑のご出身である。京大生協の教職員として、大学生協に貢献いただいた。新潟の教職員セミナーにもご一緒し、平和分科会で報告もされた。幅広い人脈と豊かな公務員体験から大学生協にも新たな視点を提起され活躍されたと思っている。古くは赤胴鈴之助や新しくはウルトラマンのファンではないかと思われる。

お話し 北野 和男さん（京都事業連合 副理事長）

聞き手 名和 又介先生（京都事業連合 理事長、京滋・奈良ブロック会長）

<表題・中見出しは、“連帯”編集部が編集しました>

生い立ちと学生時代の思い出

名和：今回、北野さんは5月で事業連合をお辞めになりますが、私と一緒に副理事長を4年間お付き合いいただきました。お互いにさまざまな面で任務分担がうまくできていたのではないかと思います。コンプライアンスの問題や経営内容についても見る目をお持ちだったと思います。ご苦労いただきありがとうございました。まず北野さんの出生のお話からお願いします。



北野：生まれた年は名和先生と同じで戦後2年目で、京都の西大路四条の西院で生まれました。桓武天皇の弟淳和天皇が院政を敷いていた所で、御所から向かって西の院ということで西院とよばれた。その頃の地名が今も残っていて三蔵町とか弓矢の練習場であった矢掛町というところもあり、私が生まれたのは北矢掛町というところでした。西院小学、西院中学を経て高校は桂高校でした。団塊の世代で高校が一杯になってしまったので府立大学の前身である西京大学家政学部跡が桂高校の分校になり、そこに1年間いました。元女子大の家政科だったので男子トイレもなく、生徒数が1000人もいた。1年生で20クラスあり、翌年に乙訓高校ができました。サントリーがある所から朱雀高校の前、中央市場、嵐山と広い校区で、大宮、西院、西京極、向日町、長岡など阪急沿線が桂高校の校区でした。



名和：柔道がお強いと伺っていましたが。

北野：中学校では9人制のバレーボールでアタッカーをやっていました。ところが高校に入学すると、背の高い人が多く、声もかからなかったので、すごすごと帰りかかった時、顔見知りの中学の先輩から柔道を誘われ、新入部員が50人ほどいましたが、農業科の農場の中にあった昔の軍需工場が道場で、しごきに近い練習で友人はやめてしまいました。いつも背中を竹刀で叩く先輩がいて、いつか投げてやろうと、それまではやめられないと思ってました。先輩が通り過ぎる時も大きな声で挨拶しないとあとで殴られたり、桂分校の1年生は本校まで歩いていかなければならず、離れているので遅刻すると、正座させられたりで、5分の1くらい的人数になりましたね。強いクラブでしたが、前近代的でした。

名和：3年間やると随分強くなったでしょうね。

北野：ところが2年の中頃に腰を壊してしまい、マネジャーのような仕事をやった後に退部しました。1年生の終わり頃が華だったかな。もともと中学生のころから柔道をやっていた人が何人かいましたが、新人戦で勝ってしまいました。

名和：その時から体つきは柔道をするような体格だったのですか？

北野：それまではバレーボールをやっていたので、飛べる体型で、体重は50キログラムの後半でした。ただ腕力はありましたね。

名和：大学は？

北野：大学は立命館大学でした。京大の法学部は落ちました。数学は特にひどい結果で落ちて当然かなと思いました。

名和：立命館大学では何を勉強されていましたか？

北野：立命館の法学部に入学しました。どちらかという和法律ではなく、政治学関係の単位を取りました。六法は最初は好きだったが嫌になり、共通科目の経済の単位はよく取りました。マルクスの経済学哲学草稿を読んで疎外された労働の概念とかなどを学んだりしました。

名和：それでは、大学で学生運動など経験したとか。

北野：学生運動に加わりました。

名和：では立命館大学の正当コースを歩んだようなものですか？立命館を出て京都大学に職員として就職されるときにお兄さんに応援してもらったと聞いたことがあります。



緑の美しい京都大学へ

北野：公務員試験を受けるときに前日に酒を飲んで酔っぱらっていました。兄と部屋が一緒だったので、兄から今日は公務員試験ではないのかと聞かれて、受験しないといたら、せっかく母が弁当作っているのに、「俺が送ってあげるから行け」と言われて送ってもらいました。午後からは筆記試験問題に皇室典範が出ました。午前中の試験でどうせ落ちているだろうと思って適当に裏まで回答を書いた、その重さで受かったのかな。

名和：試験に受かって最初の職場はどこでしたか？

北野：最初から京大ではありませんでした。刑務所の教務教官とか、宇治の女子医療刑務所とかから採用の案内がきました。成績上位者は通産、大蔵とかなどでした。どちらかといえば成績はぎりぎりを受かったのかなと思いました。教務教官とかはあまり好きでなかったのでもういかなかったです。

染色会社のテンター技師（染物したあと色が落ちないようにする機械を動かしていた）の資格を取って正職員で働きました。カルテには南ベトナム行きと書いてあったので軍需物資を作っていたのでした。全長30メートルの機械をガスバーナーをつかって乾燥させる仕事だったので四季もなく、冬も夏も50度もする職場環境だった。順調に動いていたので、夏に外は30度あっても涼しかったので外にいと、からまって生地を燃やして火を出し、それで終わりでした。

そういうときに京大の採用試験があり、元の職場は、四季もないような職場だったので、東一条など緑が美しかったのでここに決めようと思いました。珠算2級だったので経理部の管財課が最初の職場でした。場所は今は時計台1階のレストランのあるところでした。

名和：そこからどういう職場に移っていききましたか。エピソードも話してください。

北野：最初は、時計台の中にある経理部の係をまわり、14年いました。その職場は労働組合がなかった。それで支部を立ち上げに参画しました。

名和：その頃は野村先生？

北野：野村秀和先生は京大生協の理事長でした。野村先生の名前のある生協の文書処理する担当で、土地建物の許可書を出したりしていました。契約のベースになるのが蔵管1号といわれている国以外の団体に土地や建物を貸し出す規則で、今の業務委託契約書の使用条件として引き継がれています。

名和：そうすると最初の仕事は生協を管理監督する仕事だったのですね。

北野：吉田食堂の前に水たまりができるので簡易舗装してくださいと生協の要望書が出てくれば受け付けて予算部署にまわすのですが、予算部署の人からは「きちんと面積を明らかにさせて書類をださせなさい」と叱られ、その頃は若造だったので、自分で測りにいって書類を作って提出したものでした。

名和：そういう意味では生協に貢献してもらっていた訳ですね。

北野：ある時、勝手に自販機がおかれているのは条件違反だと言われたので、投影図をつくって添付図面に入れてみました。そのような役人臭いことをいう人が多くてそういう中では自分は一風変わった存在でしたね。

京大を転々と ～様々な仕事・人たちの出会い～



名和：でも京大に35年もいらしたので随分いろんな所を回られたでしょう。京都大学は大きいので大学以外の施設もありますし、どこが一番印象的でしたか。

北野：私、京大以外は出たことがなく、7年間は結核胸部疾患研究所にいました。そのときにRI診断装置を、当時ではすごい額である三億円の契約を担当しました。島津製作所が3年間かけてあたためていた製品を入札したらGE（ゼネラルエレクトリック社）が落札しました。建築は島津製作所仕様ですから溝が違ったんです。ところがガチンコ勝負したために一億円ほど余った。ただ、

納期が間に合わなかったんです。検査院が実地検査に来た時本体装置が動いてないんですよ。これがみつかったらクビやろなと思いました。検査官がくるときにはすでに出来上がっている装置とかを一所懸命に施設の説明して、見つからずに済みました。島津の機戒なら納期通りに行ったかもしれません。京大として取組んだ初期の国際入札であり、面白いものだなと思いました。

名和：そういう世界に35年もいたんですね。

北野：また胸部疾患研究所に戻ることになりました。そのころ、結核はもう淘汰された病気でした。研究する必要のないものだったので、縮小廃止するか、あとは名前を変えないと生き残れなかったんです。それで再生医科学研究所に名前が変わり、癌とか再生医療とか人工臓器とかつくるセンターと合併して行ってその中に山中伸弥先生がいたんです。最初は山中先生も任期付きの教授でした。任期付きの制度をつくったのもその部署が最初で、新しい研究所を作る時の条件だったようです。

名和：他には？

北野：農学部で舞鶴にある農学部の船の造船契約をしたこともありました。仕事は調達のことばかりしていました。当時は日本よりも韓国の造船業が主流であり、そこから安価な応札があるかもしれないという情報が流れてきて、ひらいてみると予定価格が安すぎたのか、1社しかのこらず、最低見積もり価格のところと話を詰め合うことになるんですね。進水式はいりませんとか不要な装置はみな外すとか1週間の話し合いをし、まとめました。この船は水産実験所というところの調査船で、海底の土地採取とか魚の分布とか、航海に出ると宿泊できる設備があったり、学生の実習船であったり、30メートルの大きな船だった。もう一隻は台風で転覆しました。災害復旧のためには財務省の調査官が立ち会うことになっていて、それまでは触るなということでしたが、まっていたら塩害で機械がすべて動かなくなってしまうので、サッサとクレーンで上げますと言ったら「法律を無視す



るのか」と言われました。それでも揚げてしまったら現場は喜んでくれました。調査官が来たとき、船は陸に上がっていました。

名和：それは先生からは信頼されたでしょうね。杓子定規にやられることが一番困りますね。

北野：京大原子炉実験所にも行きました。大阪の泉南熊取町にあり、単身赴任しました。原子炉実験所では、原子炉の中にある中性子をあてるための重水装置がありそれを作る為には炉心がむき出しなんですよ、その時の現場監督なんかもしました。

大学生協との出会い

名和：そのようなたくさんのお仕事をなさっていて大学生協とかかわるようになったのはいつ頃ですか？

北野：私は生協にかかわったのは最近で、8年前です。そのときは職員組合から書記長をやってくれと言われていて、支部長の経験もあり、職場が医療技術短大に移ってすぐだったのですが、休職して労組の書記を専任しようと思っていました。そのとき生駒さん（元生協教職員委員長）が頼みに来られました。それが生協に関わるようになったきっかけです。それがなければ職員組合をやっていたはずでした。



名和：それがきっかけでしたか。それで京大生協と関わるようになってどう思われましたか？

北野：生協の理事会に数時間も黙って座っていることができず、わかりもしないのに発言していました。

名和：その時の理事長はどなたでしたか？

北野：理事長は中原先生でした。途中で副理事長をされた松本先生が理事長になり、田邊先生が副理事長をされていました。その年の夏に大阪教育大学の全国教職員セミナーに新米の理事として参加しました。生駒さんからセミナーが終わってから北大、東大、名古屋大の教職員を京大の教職員交流の場に連れてこいと言われていました。よく旧帝大系ばかり集まっていると言われますが、実際は教職員委員会がある大学の交流会のあつまりです。国立大では福利厚生は、生協がほとんど担っているので、教職員の生活を守る福利厚生を議論する場は教職員委員会しかありません。ところがそういうことを議論できるのが京大とか名古屋とか広島とかの教職員委員会だった。全国教職員委員会ではそんなことを議論したら煮詰まってしまって進まない。新潟大学でやった全国教職員セミナーのなかで教職員委員会づくりの分科会が一番参加が多かったのもうなづけます。

労働組合では平和活動もありましたが熱心ではありませんでした。しかし平和活動の分科会で明治薬科大学の井上先生の基調報告に感銘しました。それは折りゾルを燃やした学生たちの話でした。私も大学生の息子を持っていましたし、何も教えていなかったからあんなことをしたのであって、自分の子供と何ら変わらないんだ、平和教育について勉強しないと子供に対して責任を負えないと思いました。それから大江健三郎の講演で戦争は知らないけれど、戦争を体験した人の経験をどうつなぐのかということ学びました。又、坂本診療所でも映画の会を立ち上げてほしいと要請され、ジャンルを決めていいのならと引き受けて平和に関する映画を邦画と洋画を交互に上映会をやりましたが、周りから北野の選考は堅すぎるといわれました。それでも30回までやってきました。

名和：それはすごいことですね。

北野：最後の上映は「広島・長崎」、その前は黒木監督の「父と暮らせば」などを上映しました。なかなか人が集まりませんでした・・・。

名和：しかしそれは大学生協とかかわるなかで、大学生協としての意味を考えての行動ですね。

北野：それから大阪教育大の教職員セミナーで平和分科会に参加したのは宮川さんと田邊先生と平さんと私の

4 人だけの参加でしたが、宮川さんが平和分科会に行くように譲ってくれたことがきっかけにもなりました。それから全国教職員委員会にオブザーバーで参加してほしいと言われました

事業連合の副理事長になって

名和：事業連合の副理事長になったときからのお話をお伺いしましょうか。

北野：副理事長になったときの最初の出来事はいきなり連合職員の不祥事の話があり、それが終わってからはシステム問題がテーマになりました。

名和：連合がもめにもめていたときに連合副理事長になられたんですね。どういう印象でしたか？えらいところに来たと感じましたか？

北野：まず、わきの甘い組織だなと思いました。公務員に対する内部法律である会計法という法律は「お前たちは一切信用しないぞ」ということから出発する。生協は性善説なのでしょうね。

名和：生協の理念に共鳴して入ってくる人たちだから悪いことはしないという前提があった。ただ全国的にわきが甘いかというかならずしもそうではないが、京都は甘かったと思います。監事会からも指摘されてきたが事業連合は専務一人態勢が続いて組織としてのコンプライアンスができていなかった。しかし、そこから随分変わったと思います。

北野：しかし、まだまだ問題が起こっているのはやはり管理の目がまだいきとどいていないということでしょうね。

名和：そういうことは外から入ってきた教職員とかが指摘すべき問題ですね。

北野：会議の時間が長かった。夜中の二時まで議論したことがあった。

名和：それを考えると今は、比較的スムーズに運営されるようになった。そういう意味では随分改革が進んでこの数年は大きく変わり、北野さんにも貢献していただきました。外からも北浦さん、赤木さん、米田さんと京都に来ていただいていい刺激になりましたね。それでは、最後になりますが、これからの大学生協に対する期待や提言がありましたらどうぞお願いします。

北野：私は大学生協は学生の福利厚生だけでなく、大学教職員や生協職員の福利厚生に寄与する組織であってほしい。大学教職員は大学に滞留する時間が長くなってきているし、生協職員は労働安全衛生法の事務所基準や労働基準法の36協定を遵守することによって職員の健康を守れると思っています。健康で働き続けられる職場環境、そういう点を今後の課題として考えていただきたいと思います。

名和：それでは今回はどうもありがとうございました。今後ご協力どうぞよろしくお願いします。

